FoodLife

2013 第10号
Vol.31 No.5
フードライフ第三十一巻第五号
平成二十五年十月一日発行通巻三五四号

特集 イタリア料理

リストランテの最新コース料理

安川哲二の今月の一品

東京五輪開催決定、東京の地酒でおもてなしを

２０２０年東京オリンピックの開催は、飲食業界にもさまざまな影響を及ぼす。オリンピックがらみのメニュー開発やサービススタッフ用の英語マニュアル作成を始めている気の早い人がすでにいる。

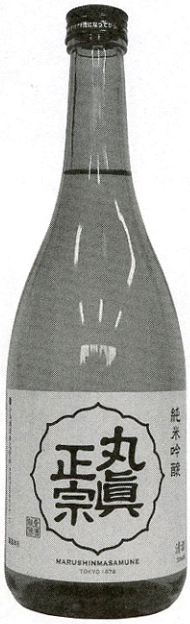
東京で開催なのだから、まずは東京産の日本酒に注目したい。関連のイベントやパーティーの乾杯はもちろん、飲食店では和のみならず洋食でも中華でも、東京の地酒をオンリストできる。日本の地方からの人や外国人には東京土産として持って帰ってももらいたい。

東京に地酒があるのか？　と思われがちだが、なんのなんの、現在東京都には10の地酒蔵がある。なかでも、唯一東京23区内にある小山酒造と神田発祥で４００年以上の歴史を誇る豊島屋本店の２蔵は話題性もあり、注目に値すると思う。

創業明治11年、「丸眞正宗」ブランド一筋で頑張るのが小山酒造だ。所在地は北区赤羽岩淵。ＪＲ赤羽駅からそぞろ歩きで行ける場所に蔵がある。蔵内では花美酒の会とかSAKEカクテル教室など気の利いたイベントを開催しているし予約で見学もできる。岩淵の地下には、秩父を源流とする浦和山脈の支流が流れているのだとか。この豊富な水資源がちょっぴり骨太の東京地酒を生み出している。

現在東村山市に居を移した豊島屋本店は、慶長元年（１５９６年）、江戸は神田の鎌倉河岸で創業した。徳川家康が江戸に入り城の改修が必要となった時期。江戸の町は普請で集まった武士、職人、商人がわんさといた。そんな人たちを相手に上方からの下り酒と田楽を楽しめる居酒屋をオープンした。初代の豊島屋十右衛門さん、アイディアマンだ。さらに、ある夜枕元に立ったお雛様から教えてもらったという白酒は大ブーム。天保７年（１８３６年）『江戸名所図会』には白酒を求めて殺到する人々の様子が描かれている。『鬼平犯科帳』『鎌倉河岸捕物控』など時代小説にも登場するので豊島屋の名前を見聞きしたことがあるという人もいらっしゃるだろう。さらに同社ブランドの「金婚正宗」は、明治神宮、神田明神、日枝神社の御神酒にもなっている。気が付かなかったって？　ならばこれを機に以後お見知りおきを。シャンパンに変わる素敵な発泡清酒もある。

味わいの良さのみならずストーリー性も十分な東京の地酒で、東京ならではのおもてなしを今から準備したいものだ。気が早いって？　それは江戸っ子の得意技だい。



丸眞正宗 純米吟醸（720㎖、1，350円税込）
小山酒造　☎03-3902-3451

大吟醸 金婚（720㎖、5，250円税込）
豊島屋本店　☎03-3293-9111